

An invitation into the validness of representative Art Education

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/675

造形教育の正当性についての一考察

—金沢市民芸術村アート工房ワークショップ
における意識調査に基づいて—

鷺山 靖・福田満佐子*

An investigation into the validness of representative Art Education

—Based on the thoughts and feelings of the participants
in the Kanazawa Folk Arts Studio Work shop—

Yasushi WASHIYAMA and Misako FUKUDA

I. はじめに

造形教育の正当性に関する議論は、これまで主に学校における造形教育、つまり教科教育としての図画工作科教育・美術科教育の正当性をその対象としてきた。図画工作科教育・美術科教育の正当性に関する議論は、学習指導要領の改訂前後（約10年毎）に活発におこなわれてきた経緯がある。その議論が活発になされる背景には、図画工作科・美術科の①授業時数の減少②教科内容の領域拡大と題材の精選③教科の独自性の希薄化にもとづく図画工作科・美術科の存続運動がある。このように造形教育の正当性に関する議論は、学校における造形教育の縮小に対する危機感が原動力となっている。

一方、学校以外の場における子どもを対象とする造形教育は、ワークショップの形式を中心に近年ますます活発な様相を呈している。⁽¹⁾そのワークショップは、実施されている場により、大きく以下A, B, Cの三つに分類される。

分類Aは、デパートや郊外に進出する大手スーパーマーケットなどの商業施設において、顧客サービス・集客をねらいとするものである。

分類Bは、美術館や公民館・児童館などの公共施設において、場の特性を活かし、施設が有する造形教育の機能を発揮させようとするものである。

分類Cは、医療や福祉の施設において、従来の芸術療法に加え、芸術のもつポテンシャルをヘルスケアに活用しようとするものである。⁽²⁾

学校における造形教育と学校外の場、特に公共施設における造形教育との差異は、おおよそ以下の三点に収斂される。

一点目は、学校における造形教育は学習指導要領という教育制度により教育内容・教育時間数ともに縮小傾向にあるが、学校以外の公共施設における子どもを対象とする造形教育は学習指導要領に縛られることなく教育内容・教育時間数ともに自由であり、全国の公共施設における造形教育に関するワークショップの教育内容は、造形遊びを中心に拡散的・実験的な傾向にあり、回数は確実に増加傾向にある。⁽³⁾

二点目は、学校における造形教育は、教員免許を有する教員が指導しているが、公共施設における造形に関するワークショップには様々な職種の人がボランティアとして指導に参加し、複数の大人が指導に関わるとともに教員免許の有無がまったく問われていないことである。特に幼児や小学校低学年を対象とするワークショップは、幼児や児童を引率した保護者も指導者の一員となる。

三点目は、学校における造形教育は、児童・生徒が同年齢層の学年で組織されるが、公共施設における造形に関するワークショップに参加

する幼児・児童・生徒は異年齢集団であり、特別に年齢や障害の程度で組織されることはあまりない。

このように公共施設における造形に関するワークショップは、教育内容・教育方法・教育時間数・活動集団、指導者数・指導者の職種に特徴があることが予想され、その状況は拡大・拡散といったキーワードで捉えられ、学校における造形教育と比べ、その理念・目標・内容・方法の差異があると思われる。

本研究では、美術館・博物館・公民館などの公共施設における造形に関するワークショップの実例として、金沢市民芸術村アート工房ワークショップを研究対象に取り上げる。以後、金沢市民芸術村アート工房を略称してアート工房とする。

本研究は、アート工房ワークショップを拡大する造形教育の一場面として捉え、まずそのワークショップの理念・目標・方法を調査する。そして、企画・運営に関わる人の造形教育に対する意識調査、そのワークショップに幼児・児童・生徒を引率した引率者(保護者)の造形教育に対する意識調査をおこなう。そして、これらの意識調査の結果をもとに拡大する造形教育の一場面に関わる大人の造形教育に対する意識を考察する。

なお、アート工房ワークショップには、筆者の福田が金沢市民芸術村アート工房創設3年目の1999年4月より企画運営ボランティアとして参加しており、筆者の鷲山も2000年5月より、企画運営にボランティアとして参加している。

II. 造形教育に関わるワークショップの現状

現在、全国各地の様々な私的・公的施設において、造形活動に関わるワークショップが活発に行われているが、その大半は美術館における開催である。

目黒区美術館学芸員・家村珠代氏は「美術館教育研究」の中でワークショップについて、以

下のように述べている。

「ワークショップとは、そもそも美術館における教育活動の一つである。美術館における教育活動は、主に次の二つの要素をあげることが出来よう。①鑑賞教育(解説要員としてのボランティアの養成を含む)②ワークショップ(又は実技講座)、これら二つの活動が意識されるようになったのは、ここ20年あまりの歴史でしかない。(略) 私が知るかぎりでは、最も早い段階で「開かれた美術館」を提唱したのは、栃木県立美術館であろう。(略) 以降、1981年宮城県美術館、1986年世田谷美術館、1987年目黒区美術館とワークショップの運営に独自性をもった美術館の設立が相次ぐことになる。」⁽⁴⁾

また家村氏は、造形に関わるワークショップを、その目的を観点とし5つの型⁽⁵⁾に分類している。

① カルチャーセンター型

基本的には、カルチャーセンターと変わらない形での教育講座として運営されるもの。

② 現代美術 教育型

先述のカルチャーセンター型ワークショップが、「造形への理解、感覚の育成を図る」ことを目的に技法等を中心とした講座が中心であるのに比較し、幅広い現代美術を理解してもらうことを主眼としている。こうした、ワークショップが運営される美術館は、館全体の方針として、近・現代美術をテーマとしている美術館に多い。

③ 学校教育連携型

積極的に学校教育と連携して美術教育を行っているようにしている美術館。

④ 自己発見型

ものをつくるという体験を通して、潜在的なもの、自己の発見を目的とする。「みる、つくる、さわる」など自主的な行為から、あるいはそれらの行為の過程で感覚、潜在的なもの、自己の発見といった、かたちになりえないものを呼び起こすことを目的としている。

⑤ その他

アメリカのチルドレン・ミュージアムに近い、子どもを対象とした文化施設や、芸術館（美術館ではなく）として美術のジャンルを複合的に展開しようとする新しい動き。

東京都の世田谷美術館では、10数年前より「市民」を対象に各種ワークショップが実施されてきた。この館の企画の特色は、活動場所を館の内部に留まらず街や自然の中にまで広げていることである。（バックトゥーネイチャー・東京の下町再発見）⁶⁾

また、横浜美術館では早くより子どもたちの造形活動に着目し、「子どものアトリエ」という明確な児童対象の造形教育普及活動についての研究が重ねられ現在に至っている。当館の活動は創作教室から鑑賞まで幅広いジャンルのワークショップが実施されている。

美術館以外の公共機関として、岐阜県の加子母村では村役場の中に「森の交流大使」⁷⁾という名称の活動員を置き、様々なワークショップを行っている。

また東京都渋谷区の「こどもの城」は、新生児から高校生まで、子どもを参加対象とした様々なワークショップの開催を目的とし、1985年設立された施設である。

金沢市内には、19の公立の美術館があり、大人対象の鑑賞講座や企画展に併せた作家の講演会等は開催されているが、子ども対象の企画は実施されていない。

現在、金沢市において、子どもの造形に関わるワークショップは、デパートや大手のスーパーマーケットなどで休日や児童の長期休暇の際に実施されている。公立では児童館（県立中央・城北児童館）・公民館・金沢市民芸術村を会場として開催されている。県立歴史博物館では「土器づくり」や縄文・弥生時代の生活体験といったワークショップが実施されているが、造形領域とは区別して考えたい。

Ⅲ. 金沢市民芸術村アート工房について

金沢市民芸術村は、「伝統と伝承が融合する豊かな文化都市金沢の創造」を目的として、1996年10月に設立された。

芸術村村長・細川紀彦氏は「豊かな文化とは、担い手である市民が、文化の受け手という立場だけではなく、つくり手としても存在することで初めて高めることが可能である。“つくり手としての市民”を育成する場として金沢市が提供したのが当芸術村である。また、同一敷地内に金沢の伝統的な技を伝える『金沢職人大学校』が設置されている。新しいものを取り入れながらより高い文化を“伝承”していく施設と“伝統”とが同じ場において一体となることで、市長の発想でもある伝統と伝承の融合による豊かな文化の創造が実現可能な場となっている。」⁸⁾と、そのコンセプトを述べている。

運営方針⁹⁾を以下に示す。

- ① 24時間、年中無休で利用できる。
- ② 使用料金は、どの工房も1区分（6時間）1,000円。他に備品使用料、冷暖房時の割増料金などは一切無料。
- ③ 各分野の利用者からディレクター（各2名）を選び各工房の運営・申し込み調整などを任せている。
- ④ 芸術村の運営に関することは、ディレクター会議で協議する。
- ⑤ 「育てる」ことを意図して、各工房にディレクターの立案した自主企画（アクションプラン）を年間延べ200本以上展開している。

アート工房は、芸術村のコンセプト「文化の担い手・つくり手である市民を育てる」場の一つとして、アート（美術・造形）分野における市民の制作・発表等の活動の場として位置づけられている。

運営方法については他の工房（ドラマ・ミュージック）と同様、大まかな企画プランニングについては2名のディレクターが担当し、実際

の活動においては多数のボランティアスタッフ達の手で、自主的に運営されている。

IV. 金沢市民芸術村アート工房における過去のワークショップ内容

アート工房におけるワークショップは、次の4つに大別される。(表1)

本稿においては、児童の造形活動に関わるワークショップとして、「文化のまちづくり事業」の中から「あつまれ!みんなの基地プロジェクト!」の活動を取り上げた。

名称	内容	開始年度
アクションプラン	企画展(入場無料) 市民公開芸術講座	1996年度
アートアドバイスデー	おもに初心者対象の制作体験活動	1996年度
芸術創造塾	若手アーティストの研鑽を目的としたワークショップ・セミナー・展覧会	1998年度
文化のまちづくり事業	子どもをテーマにした事業 —未来の金沢の文化を築く子どもたちの創造の芽を育てる— ・子ども工房 ・あつまれ!みんなの基地プロジェクト!?	1999年度

表1 アート工房ワークショップの内容分類

V. 金沢市民芸術村アート工房における本年度企画中のワークショップ

金沢市民芸術村アート工房における本年度企画(実施済みを含む)の子どもの造形に関するワークショップを表2に示す。

タイトル	日時
春休み企画・ひみつのまち	4月1日(土) ~3日(月)
あつまれ基地P6・ 風と遊ぼう	5月14日 (日)
あつまれ基地P7・むすんで あんで、みんなの基地!!	5月21日 (日)
あつまれ基地P8・ みんなの基地を描こう	7月22日 (土)
こども創造塾・ 大工さんはすごい!	7月23日・ 30日(日)
あつまれ基地P9・えのぐ 博士にチャレンジGO!!	7月24日 (月)
こどもによる ペインティング	7月25(火) ~29(土)日
あつまれ基地P10・ 新聞紙でART!!	8月4日(金) ~6日(日)
あつまれ基地P11・キュービッ クふしぎワールドをつくろう!!	8月7日(月)
あつまれ基地P12・ギョーコ ギョーコ、トソソでコロコロ	9月3日(日)
心でつくるポスター王国	9月10(日)
あつまれ基地P13・あつま れ!みんなで新聞アート	10月1日 (日)
「手でみるかたち」 西村陽平ワークショップ	10月6(金) ・7(土)日
あつまれ基地P14・わらで キュキュ、リジリしめ縄づくり	12月17日 (日)
あつまれ基地P15・ つくって、あそんで、ゴー!	1月28日 (日)

表2 本年度企画ワークショップ一覧
※表中の「あつまれ基地P」は「あつまれ!
みんなの基地プロジェクト!」の略

VI. 意識調査の内容及びその結果

関係者・参加児童の引率者の意識調査を平成12年7月23日~8月7日に実施された表2に示すワークショップを対象に実施した。そのワー

クショップの概要を資料1に示す。意識調査に用いたアンケートを資料2に示す。また、アート工房のボランティアスタッフの意識調査は、電話によるインタビューによって実施した。(インタビュー項目及び結果、分析・考察については、Ⅶ. 考察において述べる。)

アンケート「アート工房ワークショップに参加した幼児・児童の引率者の造形教育に対する意識調査」の分析結果は以下の通りである。

1. 引率者の特徴

年齢は、35歳が17%、36歳14%、34歳9%で、34・35・36歳が全体の40%にあたる。30代の合計が96名74%となっていた。

性別については、全体の95%が女性、参加児童との続柄は93%が母親であった。

職業は、主婦が70%（無職と回答した女性7%を含む）と最も多かった。

引率者の芸術村までの交通手段で最も多かったのは自家用車が91%、所要時間は10～20分48%、20～30分22%、合わせて70%が30分以内であった。

2. 引率者の造形（美術）に対する意識

引率者が造形（美術）に関心を持っているかという質問に対する回答は、まあまあ関心がある55%、とても関心がある39%、あまり関心がない5%、まったく関心がない0%であった。造形や美術に関心があると回答した引率者のうち作品制作の経験があるかについては、ないが67%、あるが27%であった。

造形や美術に関する学校・カルチャーセンターに通ったことがあるかについては、「いいえ」が75%、「はい」が17%であった。

家庭にある道具についての質問で、全体で最も多かったのは、ドライバーで96%であった。2番目はカッターナイフで95%、以下、ペンチ88%、金づち86%、きり75%、のこぎり72%、小刀50%、彫刻刀48%の順であった。

3. 引率者の子どもの造形（美術）に対する意識
子どもにとって造形（美術）活動は大切であるかという質問に対し、とても大切であるが88%、まあまあ大切である12%、あまり大切ではない・まったく大切ではない0%という結果であった。

美術館などへ子どもを連れて行ったことがあるかについて、「はい」が58%、「いいえ」は42%であった。

芸術村以外での写生会やワークショップなどの造形活動に子どもを参加させたことがあるかについて、「はい」は37%、「いいえ」は62%であった。

子どもの絵画や工作コンクールへの出品経験があるかの質問には、「ない」が65%、「ある」は35%であった。

絵画・造形教室に子どもを通わせているかどうかについて、「はい」は14%「いいえ」は86%であった。

家に子どもの作品を飾ってあるかどうかの質問について、飾っている96%、いない4%という結果であった。

4. 引率者のアート工房におけるワークショップに対する意識

ワークショップの参加理由で最も多かったのは「子どもにいろいろな体験をさせたかったから」の90%である。2番目に多かったのは「子どもが、こういった活動（造形活動）が好きだから」58%となっていた。

以下、引率者自身が造形活動に関心をもってしているからが30%、アート工房企画に以前に参加したことがある、いわゆるリピーターの参加者が18%、友人に誘われたからの28%の順になっていた。

ワークショップについての情報入手方法で、最も多かったのが、友人・知人に聞いた、の47%であった。2番目はダイレクトメールで知った27%、以下、テレビや新聞等で知った16%、その他14%、芸術村内での掲示で知ったが5%、

偶然に参加した1%の順であった。

アート工房のワークショップへの参加状況は、以前に参加したことがあるが48%、今回初めて参加したが51%であった。

以前に参加したことがある引率者の参加回数は、最も多かったのが1回の35%、以下…2回22%、3回19%、5回11%、4回6%、6回5%、10回以上3%の順であった。

ワークショップの内容に対して、とても満足しているとの回答が53%、まあまあ満足している40%、あまり満足していないとまったく満足していないが各1名で1%という結果だった。93%の引率者が満足しているとの結果が得られた。

ワークショップへの要望について、また参加したいと感じている引率者が最も多く70%、ついで他の施設においての実施を希望する引率者が23%となっている。次が道具の種類や数に関する要望で種類と数を合わせて20%だった。もっと広い場所で活動したいとの要望は3%であった。

参加費について、現状維持でよいとの回答が46%、もっと安い方がよいが17%、すべて無料にとの要望が12%という結果であった。

今後のワークショップに対する要望についての記述回答は、「素材として粘土を扱ってほしい」との声が7名と最も多かった。次に「家庭ではできない」という表現でダイナミックな体験活動を希望する声が4名あった。持ち帰ることができる作品制作を目的にした活動を好む声も4名あった。

5. アート工房ワークショップのボランティアスタッフの性別及び職種

ボランティアスタッフへのインタビュー等により判明した性別及び職種を表3に示す。現在、アート工房企画のワークショップ「あつまれ！みんなの基地プロジェクト！？」のスタッフは、表3に示す23名のメンバーにより構成されている。

性別	職種
女	看護婦
女	アート工房ディレクター
女	児童館副館長
男	職人大学講師・大工
男	建築家 大学教員
女	児童館職員
男	美術館 学芸員
男	公立児童会館 保育士
女	アート工房ディレクター
男	彫刻家
男	造形インストラクター
男	職人大学講師
男	美術大学 教員
男	陶芸家 公立工芸工房職員
女	美術教室 講師
女	児童館 職員
女	小学校図工科教員
男	小学校図工科教員
女	フリーター
男	大学(油絵) 教員
男	高校・高専教員 画家
女	フリーター
男	大学(美術教育) 教員

表3 ワークショップ・ボランティアスタッフの性別及び職種

メンバーのうち2名はアート工房のディレクターと兼任しているが、他の21名はこの企画を目的にボランティアとして参加したメンバーである。メンバーの職種を見ると、児童館職員、保育士、職人大学講師、教員、美術館学芸員、作家、と実に様々な職種に携わっている。

Ⅶ. 考察

1. 参加した幼児・児童の引率者の造形教育に対する意識

①引率者の特徴について

引率者はその大半が、30代半ばの主婦で幼児をもつ母親であり、芸術村より自動車で30分以内の場所（金沢市内・金沢市近郊）に居住していることがわかる。引率者自身が造形（美術）に関心を持ち、子どもの造形（美術）教育への関心も高いことがデータより考察される。

参加者に幼児が多いことから、母親が引率するだけでなく必然的に子どもの活動の手助けをし、子どもとともに活動に参加している様子が見られた。また、ワークショップの内容によっては、参加児童の年齢に関わらず親子で共同製作する姿も見られた。子どもたちとともに活動に制作し参加する姿からも、引率者の子どもの造形教育への関心の高さがうかがえる。また、全体の8%にあたる10名が自動車で30分以上という遠隔地から参加している。参加者名簿より小松市・松任市・河北郡・石川郡といった金沢市近郊ばかりでなく小松市や能登島町からの参加が確認されている。

こうした引率者の姿勢からも子どもの造形教育に対する関心が高いことが考察される。

②引率者の造形(美術)に対する意識について

94%というほぼ全員に近い引率者が造形・美術に関心を持っている。関心は持っているが、作品を制作したりカルチャーセンター等に通ったりという経験はあまりないことも数値から読みとれる。

家庭にある道具についての質問で、クッターナイフ・ドライバーがそれぞれ95%・96%と高い数値を示していた。それに対して、彫刻刀・小刀は48%・50%と低い数値を示していた。これは、クッターナイフ・ドライバーは日用品として捉えられ、ある程度家庭に普及しているためであり、彫刻刀・小刀は作品制作のための特殊な道具と捉えられていることによるものと考察する。W1においては、金づち・彫刻刀・クッターナイフ・ペンチ・ドライバーがいずれも100%家庭にあるという回答結果で、他の4つのワークショップとは大きく異なるデータが表

れている。これはW1の活動内容・参加対象年齢が他の4つのワークショップと異なり、それに伴って引率者の年齢層が高く、父親の引率も他より多かったことによると考えられる。また、参加者が小学校高学年児童と中学生であることから、学校で使用する道具を家庭にあるものと判断したためであるとも考察される。

造形（美術）にあまり関心がないと回答した全体の5%にあたる7名についても、引率者自身は造形にあまり関心を持ってはいないが子どもにとって造形は大切なものであり、子どもに造形活動を含むいろいろな体験をさせたいと考えていることは、データより明らかである。

③引率者の子どもの造形(美術)に対する意識について

①②でも述べてきたが、引率者全員が程度の違いはあれ、子どもにとって造形（美術）活動は大切であると捉えていることがデータより考察される

一方で、子どもにとって造形活動は大切であると全員が答えてはいるが、美術館へ連れて行ったり、他の施設での活動に参加させたりしている割合は、全体の半数やそれ以下に留まっている。またコンクールへの出品経験も多くはない。しかし、これらのことは、児童の年齢との関わりからくる数値の違いであり、引率者の子どもの造形（美術）活動に対する意識とは関わりがないものと考えられる。

対外的な活動に参加はしていなくても、ほぼ全員に近い数の引率者が「子どもの作品を家に飾っている」と答えている。子どもの作品を飾るという行為は、引率者が子どもの制作活動・作品を大切なものと捉えている姿勢の現れであると考察される。このことから、引率者の子どもの造形への関心の高さがうかがえる。

④引率者のアート工房におけるワークショップに対する意識について

アート工房のワークショップに対する意識に

については、データより、回答者のほぼ全員に近い人数が子どもに様々な体験を提供してくれる場を求めている事がわかる。また2番目に「子どもが…好きだから」という回答が多かったことから、子ども自身が自分の意志で参加を希望して引率して来た場合と、引率者が子どもにさせたい体験のひとつとして選択し且つ子どもも興味・関心を持てる活動として認識した上で参加した場合とが考えられる。いずれも、引率者の教育方針や教育に関する諸活動への関心の高さをうかがい知ることができる。

参加理由として、データ上では、いわゆるリピーターの参加者は18%となっているが、夏休み期間中ということもあり、ダイレクトメールにより情報入手するリピーターよりも、他の手段により情報を得た一般参加者のほうが多くの人数を占めていると考えられる。友人に誘われてとの回答が、全体では28%となっているが、W3では半数以上の52%となっている。これは、この日の活動内容が芸術村オープン以来の恒例行事であることから、ワークショップ開催の情報が長期間にわたって流れていること、参加者が就学前の幼児が多く母親同士の口コミによっても広がっていったことが考えられる。また、偶然に参加したとの回答が全体の中でも一人であることから、参加者はみな、何らかの明確なねらいや意図を持って参加していると考えられる。

情報入手方法の中で、回答者全体の5%が、芸術村内での掲示により知り得たと答えている。芸術村入り口近くの掲示板や工房の入り口には、行事開催のかなり前からチラシ・ポスター等により紹介されている。他の工房(ドラマ・ミュージック)でのイベントに参加した折りに目にした、散歩の際に知った、等が考えられるが、いずれも文化活動に興味・関心なりを持った人達であると予想される。

その他の情報入手として、夏休み期間中であることから、1学期末に市内全小中学校の児童生徒に配布された市教育委員会作成の広報「ト

ラッチャ」によって知ったという回答が5名あった。公共機関の広報に掲載されたのは今回がはじめてであるが、子どもの造形(美術)活動に関心を持つ保護者に対しての情報伝達手段として効果的であったと考えられる。

ワークショップの内容に満足することができたかという問いに対して、高い数値を示しているW2とW3の活動は、ともに造形遊び的な内容で、質問Aの回答結果にもあったように、子どもに体験をさせたいという引率者の要望にうまく応えることができた活動であったと考えられる。

ワークショップに対する要望の中に、道具の数が不十分であれば、数に似合うように参加者数を限定してはどうかとの意見があった。諸般の事情・状況から考えても今後、参加者数を無制限にすることについてはスタッフ側でも検討中である。ただ、スタッフ側の意図として、仲良く共同で道具等を使う・多人数で楽しく活動する、との観点に立つと、道具の種類・数を増やす事が参加者からの要望であっても必要ではないと思えるが、参加者・引率者にその視点を明確に伝えていく必要があると考えられる。

参加費について、半数は現状維持でよいと答えているが、17%の減額希望者の声も一考の余地があるだろう。公共施設で開催する性質上、できるだけ安価な参加費を望むのは当然であるとも考えられる。しかし実際には、材料費の一部だけが参加費に充てられており、そのほとんどはアート工房の予算や文化庁の補助でまかなわれている。また体験活動だけの日程で作品として参加者に還元できないような場合は、参加費は無料となっている。また、公共施設での開催であることから、他の民間施設での開催よりは、かなり低額の参加費となっていることも事実であり、大きなメリットとも言えるだろう。現状維持でよいと応えた大半の引率者はこういった事情を理解しているものと考察する。

その他の要望として記載された意見は、おおむね活動内容に対するものであった。W1で参

加対象が比較的高学年の子どもたちであったにも関わらず難易度が高かったという意見、道具を使わず幼児か安全に遊べるような企画を希望する意見、就学前の幼児と小学生が混在する中で説明を皆が理解するのが大変である、といった意見などがあり、いずれも子どもの造形活動に関心が高いからこそ出される声であったと考えられる。

2. ボランティアスタッフのワークショップによる子どもの造形教育に対する意識

アート工房のボランティアスタッフ23名の内、6名に電話インタビューにより、子どもの造形教育に対する意識を調査した。そのインタビューの具体的な項目は、以下の通りであった。

- ①スタッフとして参加した動機・理由・時期
 - ②子どもの造形に対する意識
 - ③ワークショップにおける成果と課題
 - ④アート工房におけるワークショップに対する今後の展望
- 以下、各項目に対する考察を述べる

①スタッフとして参加した動機・理由・時期について

スタッフとして参加した時期については、今回インタビューした6名のうち5名は1999年度プロジェクト開始時からのメンバーである。あと1名は今年度4月よりディレクターに就任しスタッフを兼任している。スタッフとして参加した動機・理由についてはメンバーの職業に関わる場所が大きい。公立児童会館保育士であるスタッフA、児童館副館長のスタッフB、児童館職員のスタッフCらは、児童館の職員であることから子どものためのプロジェクトの要員として要請され参加している。大工であり職人大学講師でもあるスタッフDは、職人という立場で造形活動へのアドバイザー的な参加要請をされメンバーとなった。画家で高校・高専でも教鞭をとっているスタッフEは、アート工房における他の企画のスタッフとして以前より参加

していたことからメンバーに加わった。5名ともに職業を企画の中に生かしてほしいとの要請があったことが、参加のきっかけではあるが、インタビューの中で共通する動機・理由が述べられていた。スタッフDは「いつも、正確な図面をもとに四角四面の仕事をしているので、子どもたちから新しい発想、おもしろい発想が学べるかもしれない、と思った。」と語り、スタッフAは「子どもの自由な創造活動に興味があった」と語っている。スタッフB・スタッフC両者はともに、子どもたちの発想の豊かさを認めた上で、ワークショップの場における子どもたちの活動を支援すると同時に、より創造性の高い活動へと結びつけていきたいという抱負をもっていた。

いずれも、子どもの発想から得るものが大きいとの捉え方であり、参加の動機ともなっていると考えられる。

②子どもの造形に対する意識について

①でも述べたように、今回インタビューしたスタッフは皆、子どもの発想・創造力は豊かで高いものと捉えている。一方、子ども達は技術が伴わないためにせつかくの発想が形として実現できていない実態があるとも捉えている。

スタッフEは、「自分の中で大人と子どもの区別はあまりない。大人が楽しんでやっているのを見て子どももやってみたいと思うだろうし、子どもが楽しく活動する様子から大人もイメージを広げることもある。大人でも子どもの魂というか子どものような夢をもっている人はいる。子どもでも大人に負けない創造性を持っている子もいる。大人と子どもの共通して持っている部分を大切に活動をつなげていけばいい。」と語っている。

③ワークショップにおける成果と課題について

スタッフAは「1年間、いろいろな試みを通して、スタッフそれぞれの職業の個性を出すことができたと思う。課題として、その個性を子

どもたちに生かされたいように思える。子どもが『基地』に対して持っているもの・望んでいることをもっと探っていく中で、最終的にめざすところをみつけ、それを目標に活動していきたい。」と語っている。

スタッフがそれぞれの特性を生かした各種ワークショップを企画開催してきたが、プロジェクトとしての一貫性が希薄であることが課題となっている。

スタッフCが「アート工房には、やりたいという思いをもった子どもたちがやって来る。…もう少し年齢層の上の子どもたちが参加してくれるとよい。」と語っているように、参加対象年齢の見直しが今後の大きな課題の一つであると捉えている。また、スタッフBも「年齢の低い子と高い子が一緒に活動するのは無理があるのではないか。」「現在、引率者なしで来ている子(小中学生)は徒歩か自転車でも比較的短時間で来られるような子だけである。遠くても是非行きたいと思えるような企画を考えていきたい。」と語っている。スタッフBの話は、ワークショップの参加対象年齢の見直し・広報の見直しのみならず、内容の吟味の必要性にも関わる指摘であると考えられる。

④アート工房ワークショップの今後の展望について

スタッフBは「子どもが一人でやってきても、その場でよこんで過ごせる、少人数でも本当に好きな子が好きな活動をのびのびとできる場にしたい。子どもには無理かなと思われる活動でも、スタッフが安全面で見守る中でもっと自由にさせてもよいのではないか。」と語り、スタッフDもまた「今後の活動についても、職人の現実的な目での捉え方で、子どもには無理なのではないか、もっと他にあるのではないかといった意見を出していく…」と語っている。両者の意見は、子どもの造形活動の特徴・形態を明確に分析し、その上での環境設定を検討していく必要性を示唆していると考えられる。

スタッフEは「学校での授業には規制がある。学校と違う場で、違うスタンスで、自分自身も楽しめる活動を考えていきたい。」と語っている。同様に、スタッフBも「アート工房だからこそできる活動を考えていきたい。」と語っている。アート工房の独自性を生かしたワークショップを模索していくという姿勢がうかがえる。

また、スタッフAが「芸術・アート」というと大人には敷居の高い、近寄りがたいイメージがある。『アートはもっと身近なものだよ』と、子どもたちの活動を通じて自然に理解してもらえるよう努めていきたい。」と語っているように、「アート」そのものの捉え方についてもスタッフ内で論を深めていくべきだという課題を提示していると考えられる。

VIII. 終わりに

本研究では、造形教育の正当性に関する考察にむけて、拡大する造形教育の一場面に関わる大人の造形教育に対する意識を考察することをねらいとし、アート工房ワークショップを拡大する造形教育の一場面として捉え、まずそのワークショップに幼児・児童・生徒を引率した引率者(保護者)の造形教育に対する意識調査を実施した。そして、企画・運営に関わるボランティアスタッフの造形教育に対する意識をインタビューなどによって調査した。また、調査にあたり筆者2名もボランティアスタッフとしてワークショップに参加した。アート工房ワークショップのボランティアスタッフ、児童の引率者、学校教育における造形教育の指導者である筆者2名の子どもへの造形教育に対する意識は、①子どもにとって造形活動は重要である。②子どもに造形の世界を体験させたい。③子どもの造形に対する興味関心をより深めたい。の三点において共通している。この三点が、学校外の造形教育の場であるアート工房において結実しているものと認識しており、アート工房の場とボランティアスタッフの特性が発揮されている

事例であると理解している。

アンケートの対象を引率者に限ったため、参加した子ども特に幼児のアート工房ワークショップに対する意識は、考察に至らないが、筆者がボランティアスタッフとして児童・幼児に接し、また観察した結果、上記の「③子どもの造形に対する興味関心をより深めたい。」は達成されたものと判断している。このことが即座に造形教育の正当性を裏付けるものではないが、本研究が研究対象としたアート工房における計5回(12日)のワークショップに736名の子ども達が参加した事実は、造形教育の必要性を如実に表しているのではないだろうか。

アート工房における子どもを対象としたワークショップは、現代社会における造形教育の必要性にもとづき、学校外の場において企画運営された一事例である。公教育としての学校教育の範疇では、実現しえなかった造形教育の新たな一部分が、行政とボランティアスタッフを中心に実験というかたちで実践されていることが確認された。

今後、金沢市における拡大する造形教育の一場面として、金沢市民芸術村アート工房に加えて近い将来開館する現代美術館での子どもを対象とする各種のワークショップがあげられる。金沢市における子どもの造形教育を「学校教育における造形教育」と「公共施設における造形教育」に区別して捉えるのではなく、両者における造形教育の内容を連動させ、スタッフと教諭の交流を図り、共通する造形教育の理念を実現する場として学校と他の公共施設を捉えなおしたい。なお、金沢市民芸術村アート工房における本年度企画中の最終回のワークショップ「あつまれ！みんなの基地プロジェクト！？つくって、あそんで、ゴー！（仮称）」に本学大学院教育学研究科美術教育専攻の学生もボランティアスタッフとして企画・運営に参加する予定である。

— 註 —

- 1) 生涯教育と関連して美術館においては、教育普及を担当する専門部門を設置することが課題となっており、市民とりわけ青少年、年少者への取り組みが数多く報告されている。(美術館教育普及国際シンポジウム1992美術館連絡協議会設立10周年記念誌)
- 2) 「癒し」が流行しているが、栗原彬は、現在流行しているものは消極的な癒しであり、積極的な癒しを提唱している。(播磨靖夫「アートフル・アドボガシー 生命の、美の、優しさの恢復 芸術とヘルスケアのハンドブック」、財団法人タンポポの家、1999, pp. 176～181)
- 3) その一例として、東京のこどもの城では、1985年より全国の新生児から高校生までを対象に体育・プレイ・造形・音楽・AV等の独自のプログラムによるワークショップを展開している。
- 4) 家村珠代「美術館教育研究 Vol. 8, No. 1」美術館教育研究会 1997 p. 33
- 5) 家村珠代「美術館教育研究 Vol. 8, No. 1」美術館教育研究会1997 p. 34～35
- 6) 2000年7月4日、財団法人地域創造主催ステージラボ金沢セッション美術コースにおいて、世田谷美術館学芸員・高橋直裕氏の講演による
- 7) 2000年7月4日、財団法人地域創造主催ステージラボ金沢セッション美術コースにおいて、岐阜県恵那郡加子母村役場企画課・森の交流大使・小川知子氏のインタビューによる
- 8) 2000年9月24日、金沢市民芸術村において、芸術村村長・細川紀彦氏のインタビューによる
- 9) 「地域における多彩で豊かな文化活動拠点の形成を目指して—公立文化会館の活性化とその役割—」公立文化会館の活性化に関する調査研究協力者会議 2000 p. 31

— 参考文献 —

- ・「美術館教育普及国際シンポジウム 1992美術館連絡協議会創立10周年記念誌」美術館教育普及国際シンポジウム実行委員会(横浜美術館内) 1993
- ・「美術館教育普及国際シンポジウム1992」美術館教育普及国際シンポジウム実行委員会(横浜美術館内) 1993
- ・海野阿育・山口喜雄「横浜市美術館(仮称)『子どものアトリエ』調査委託報告書第3号」子どものアトリエ研究会 1986
- ・赤星千春・大橋浩美・黒沢伸「水戸芸術館現代美術センター資料33号 誌上シンポジウム ミュージアム・セッション『美術館とボランティア』」水戸芸術館 現代美術センター 1997
- ・増田洋『学芸員のひとりごと◆昨今美術館事情◆』 芸艸堂 1993
- ・「水戸芸術館現代美術センター編 現代美術事典90S」水戸芸術館 現代美術センター1997
- ・渡辺博史『<学校改善実践全集 25>社会教育と連携する学校』 ぎょうせい 1986
- ・長谷川総一郎・福山博光・山田一美『地域文化と美術教育』 長門出版社 1995
- ・「現代造形・美術教育の展望—真鍋一男退官記念論集—」真鍋一男退官記念論集刊行会 横浜国立大学教育学部 美術科研究室 新曜社 1992
- ・「美術館教育研究 Vol.8, No.1」美術館教育研究会 1997

*本稿の執筆分担は、Ⅰ・Ⅷ=鷺山、Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ
・Ⅴ=福田、Ⅵ・Ⅶ=鷺山、福田が担当した。

略名	タイトル・内容	月 日	曜日	開催時間	対象者	参加費	持ち物	参加児童数	アンケート回答者数
W1	「職人の技」大工さんはすごい!! 「継手と仕口」	7月 23, 30日	日	10:00 ~16:00	小学校高学年 ~中学生	500円	昼食	42	11
W2	「えのぐ博士にチャレンジ!GO!!」	7月 24日	月	10:00 ~12:00 13:00 ~15:00	3歳くらい~	300円		85	23
W3	「こどもによるペインティング」ひろ~い紙におもいっきりのびのび~と描こう!!	7月 25~29日	火 ~土	13:00 ~15:00	3歳くらい~	500円		312	33
W4	「新聞紙でART!!」	8月 4~6日	金 ~日	13:00 ~15:00	4歳くらい~	無料	新聞紙 10日分	189	30
W5	「キュービック・ふしぎワールドをつくらう!!」	8月 7日	月	10:00 ~15:00	4歳くらい~	300円	昼食	108	33

資料1 調査ワークショップ概要一覧

資料2-1 アンケート用紙

きょうのワークショップについておたずねします。

1. このワークショップに参加した理由を下にあげた中からあてはまるものを選び、○をつけてください。(いくつ選んでもかまいません)

- ① 子どもが、こういった活動(造形活動)が好きだから
- ② 自分が、造形活動に関心があるから
- ③ 子どもに、いろいろな体験をさせたいと思ったから
- ④ 友人に誘われたから
- ⑤ アート工房の企画にこれまでも参加してきたから
- ⑥ その他

2. このワークショップを、どうやって知りましたか?下にあげた中からあてはまるものを選び、○をつけてください。(いくつ選んでもかまいません)

- ① ダイレクトメールで
- ② 芸術村内の掲示で
- ③ 友人や知人に聞いて
- ④ テレビや新聞等で
- ⑤ たまたま来てみたからやっていた
- ⑥ その他

3. これまでに、アート工房が企画したワークショップに参加したことがありますか?○をつけてください。

- ① ある
- ② ない

「ある」と答えた方は、何回ぐらい参加しましたか?あてはまる回数に○をつけてください。

- 1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8, 9, 10, 10回以上

4. きょうのワークショップはいかがでしたか?下にあげた中からあてはまるものを選び、○をつけてください。

- ① とても満足している
- ② まあまあ満足している
- ③ あまり満足していない
- ④ まったく満足していない

5. きょうのワークショップへの要望について、下にあげた中からあてはまるものを選び、○をつけてください。(いくつ選んでもかまいません)

- ① 同じワークショップをまた開催してほしい
- ② 他の公共施設においても実施してほしい
- ③ もっと広い場所で開催してほしい
- ④ 道具の種類を増やしてほしい
- ⑤ 道具の数を増やしてほしい
- ⑥ 参加費について
- (ア) すべて無料にしてほしい (イ) もっと安くしてほしい (ウ) このままでいい
- ⑦ その他 ()

6. 今後やってほしいワークショップがあればお書きください。

[] 次ページにつづく

金沢市民芸術村アート工房ワークショップに

参加した子どもの引率者の造形教育に対する意識調査

2000年7月～8月

おねがい

金沢市民芸術村アート工房は、1996年に創設し今年で4年目となります。アート工房の最大の特徴は、その企画・運営がすべて市民ボランティアによってなされている点にあります。また、アート工房でのワークショップは、ワクワク・ドキドキといった幼児と児童の心と体を豊かにひらき、造形のたのしさと美しさをストリートに体験させることを第一の願いとしてきました。

さて、金沢大学教育学部藤山研究班もアート工房の市民ボランティアに参加するとともに、今年度、アート工房における造形教育の実態と関係者の意識調査を実施しております。

このアンケートは、アート工房ワークショップに参加した幼児・児童の引率者の造形教育に対する意識調査を目的としています。そして、このアンケートの結果は、今後の造形教育のあり方を考える一資料となります。なお、お答えいただいた結果はすべて統計的に処理され、あなたの個人的データが公になることは決してありませんので、お答えのまますべてお答えください。

今後のアート工房ワークショップをいっそう魅力的なものにするにとともに、学校における造形教育を改善してゆぐため、なにとぞご協力くださいますようお願い申し上げます。

金沢大学教育学部美術教室 藤山靖 福田満佐子

次ページにつづく

資料2-2 アンケート用紙

子どもの造形教育について、おたずねします。

- 1. 子どもにとって、造形(美術)活動は大切だと思いますか?下にあげた中からあてはまるものを選び、○をつけてください。
 ① とても大切である ② まあまあ大切である
 ③ あまり大切ではない ④ まったく大切ではない
- 2. 美術館などへお子さんを連れて行ったことがありますか?○をつけてください。
 ① はい ② いいえ
- 3. 写生会やワークショップなどの造形活動(芸術村をのぞく)にお子さんを参加させたことがありますか?○をつけてください。
 ① はい ② いいえ
- 4. 絵画や工作のコンクールに、お子さんの作品を出品したことがありますか?○をつけてください。
 ① はい ② いいえ
- 5. 絵画教室や造形教室に、お子さんを通わせていますか?○をつけてください。
 ① はい ② いいえ
- 6. 家に、お子さんの作品をかざっていますか?○をつけてください。
 ① はい ② いいえ

あなたご自身について、おたずねします。

- 1. あなたの年齢は? ()
 才
- 2. 性別は?○をつけてください。 ① 男性 ② 女性
- 3. まよのワークショップに参加した子どもとの続柄は? ()
- 4. 芸術村までは、どのようにして来られましたか?○をつけてください。
 ①徒歩 ②バス ③タクシー ④自家用車 ⑤その他 ()
どのくらい時間かかりましたか?○をつけてください。
 ① 5分程度 ② 5~10分 ③ 10~20分 ④ 20~30分 ⑤ 30分以上
- 5. ご職業は何ですか?よろしければお答えください。()

- 6. 造形(美術)に関心がありますか?下にあげた中からあてはまるものを選び、○をつけてください。
 ① とても関心がある ② まあまあ関心がある
 ③ あまり関心がない ④ まったく関心がない

- 7. 6で関心があると回答した方は、なにか作品を制作したことがありますか?○をつけてください。
 ① はい ② いいえ

- 8. 造形(美術)に関する学校やカルチャーセンターなどに、通ったことがありますか?○をつけてください。
 ① はい ② いいえ

- 9. 次のうち、あなたの家にある道具に○をつけてください。
 ① のこぎり ② 金づち ③ 小刀
 ④ 彫刻刀 ⑤ カッターナイフ ⑥ きり
 ⑦ ペンチ ⑧ ドライバー

以上で、アンケートは終わります。ありがとうございました。

写真1. 2 金沢市民芸術村アート工房ワークショップにおける子どもの活動の様子



写真1



写真2